朝顔形は口縁部（7）、口頸部屈曲点付近（8）、肩部（9・10）がある。9・10では赤色塗彩の痕跡が認められる。

陶器　11は上底の土師質の製品である。体部はカキメによる調整である。外面には煤が付着し、内面は全面灰色の釉がかかっている。

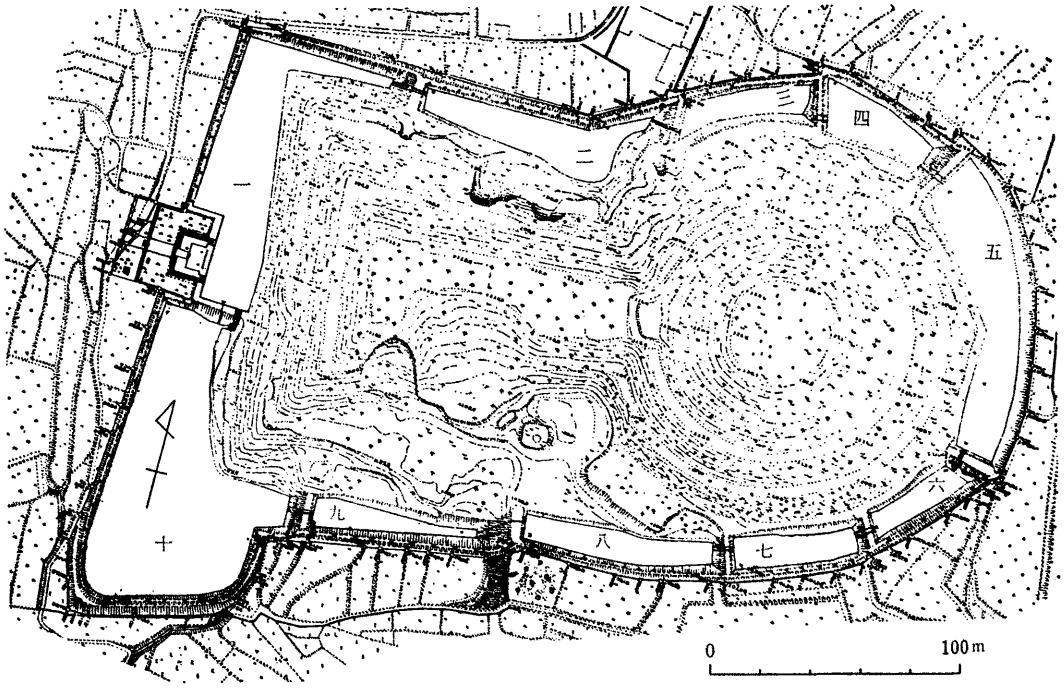
以上が男狭穂塚・女狭穂塚陵墓参考地外周埒垣改修その他工事に伴う調査の概要であり、これらの成果をふまえ、工事は予定通り実施した。

（福尾正彦）

景行天皇山辺道上陵整備工事区域の調査

大和盆地の東南部には多くの古墳が知られている。それらは分布状況によりいくつかのまとまりに区分されるが、景行天皇山辺道上陵は大和古墳群に属する。全長約三〇〇メートルを計る前方後円墳で、墳丘の周囲には、一〇箇所の渡土堤によって階段状に区画された左右非対称の周濠がめぐっている。濠には前方部正面北側を起点とし、一号から十号までの番号が付されている（第26図）。

経年の波浪等により、墳丘裾等の浸食が進んできたため、護岸を中心とした整備工事が計画され、平成五年度にそのための事前調査を実施した。その成果は本誌前号において報告したが、今年度は実際の施工にあたり、立会調査を行い、事前調査時に検出された遺構が損なわれないよ



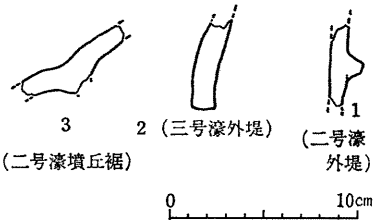
第26図　山辺道上陵地形図（1/3000）

う努めるとともに、施工箇所において遺構遺物の発見に努めた。その結果、葺石や埴輪列などは認められなかったため、工事は予定通り施工したものの、後述するような遺物が採集されたので、ここに報告する。

なお、遺物は本誌前号で報告したⅡ層（後世の盛土）・Ⅲ層（崩落堆積土）・Ⅳ層（濠内の堆積土）から出土しており、Ⅴ層（原初の遺構）からの出土例は認められなかった。

今回、採集された遺物は埴輪一一点、磁器二点、瓦一一点の計二三点である。いずれも小片となっており、器表の摩耗が著しく、調整手法を明確にできるものは少ない。

埴輪（第27図1～3）　従来、本陵で知られている資料と同様の特色を有するものである。外面は灰褐色、もしくは淡い赤褐色を呈している。焼成はいわゆる埴質で、黒斑の認められる破片もある。胎土にはやや多くの小～中砂粒を含んでおり、摩耗のため、器表に露呈している。突帯の形状が判明するものは一点のみである（1）。器壁の厚さに対し、突出度が比較的高く、上下辺のナデ付けが著しい。底部（2）の底面には縄目状の圧痕が認められる。3は朝顔形の口頸部の屈曲部付近であるが、突帯の形状は不明である。



第27図　山辺道上陵の出土品（1/4）

磁器　二点とも一号濠外堤の濠側肩部から出土している。ともに染付の小片で、幕末前後のものであろう。

瓦　いずれも一号～三号濠の外堤から出土した。黒く燻した瓦で、なかには玉縁を有する丸瓦がある。

（福尾正彦）

平成五年度　安閑天皇陵古市高屋丘陵整備工事区域の調査

安閑天皇陵は、石川東岸に広がる独立丘陵を利用して営まれた前方後円墳である。応神天皇陵などで構成される古市古墳群の最南端に位置する。現在の墳長は一二二メートルを計り、二箇所の渡土堤によって区画された濠がめぐっている（第28図）。

本陵においても永年の波浪等により、墳丘や外堤裾の浸食が進んできたため、護岸を主とする整備工事が実施されることとなり、平成四年度にそのための事前調査を行った。その結果は本誌前々号において報告したが、五年度は実際施工するにあたり、立会調査を行った。

調査の結果、墳丘や外堤裾部に関しては、事前調査に加える所見はほとんどないが、拝所の濠側部分において石積改修工事の基礎掘りが地山以下に及んだので、該所における成果を記しておきたい。また、一般拝所における排水管改修箇所においても新たな所見が得られたので、ここに報告することとする。